

When a new planet swims into *my* ken —— イギリス・ロマン派の詩を読む場所と時間 ——

アルヴィ宮本なほ子

(1) (外国) 文学の発見の喜び

1816年、キーツ (John Keats 1795–1821) は、初めてホメロスを読んだ感動を“On First Looking into Chapman’s Homer”で、“Then felt I like some watcher of the skies / When a new planet swims into his ken” (9–10) と表現している¹⁾。このソネットは、これから詩人として成長する文学青年の打ち震える感動をまず新星の発見に喩え、次にコルテスの新大陸発見に喩え、後者に政治的意味を読み込む解釈に重心が傾きがちだが²⁾、新しい惑星が自分の視界に入ってくるという言い方は、地球の遥か彼方にある天空の星と自分との空間的距離、星の光が地上に達するまでの時間をこの作品の読者に想像させる点で、読者の生きる場所、時代とは異なるところで書かれたテキストを読む、発見する喜び、それがもたらす瑞々しい興奮を、読者に余すところなく伝える。キーツが英訳でホメロスを読んでいることは、現代、多くの人が体験する外国文学との最初の出会いと同じで、母国語の英語で外国文学を読むことについて書かれたテキストであるという点も見逃せないのである。

キーツのこのソネットは、イギリス人が非英語圏の素晴らしい文学テキストを発見し驚愕するときに、繰り返し思い起こされることになる。例えば、“a new planet” (10) は、約100年後、*TLS*の1917年11月15日号の冒頭の書評のタイトルになる。“A New Planet”の筆者クラットン＝ブロック (Arthur Clutton-Brock 1868–1924)³⁾は、西欧文学の伝統とは全く別の伝統の中で生まれた文学——ウェイリー (Arthur David Waley 1889–1966)⁴⁾が翻訳した“Po Chu-i” (白楽天 772–846) の作品や唐代以前の多くの詩——を「新しい星」として発見した。クラットン＝ブロックは、読者に“Read them and you will find that a new planet swims into your ken” (*Times Literary Supplement* No. 826. Nov. 15, 1917. 545) と呼びかけ、ロンドン大学東洋研究所の会報に発表されていたウェイリーの翻訳は注目を集めた。ウェイリーは翻訳をさらに進め、翌年、*A Hundred and Seventy Chinese Poems* の出版に漕ぎ着けるのである。

イギリスでは、第一次世界大戦の前後から、モダニズムの影響もあって、東洋の異なる文字圏のものが英語に翻訳され、キーツの詩を背景に“a new planet”が東方から出現す

る。パウンド (Ezra Pound 1885–1972) の *Cathay* (1915) の表表紙に大きく印刷された「耀」の文字も、キーツが「新しい惑星」と言った異文化の詩の輝きを東洋の文字で伝えていられると思われる⁵⁾。文学テキストが、それが生まれた時代も文化圏も文字圏も異なる所で読まれるとき、何が起こるのだろうか。イギリス・ロマン派の詩は、19世紀中葉以降、海を越えて世界中で読まれるようになってきているが、ワーズワス (William Wordsworth 1770–1850) は、『抒情歌謡集』 (*Lyrical Ballads*) の序文 (1802) で、詩の題材を普通の生活の中から選び、普通の言葉を用い、想像／創造力で色付けすることを提唱し、この時に作品から浮かび上がるのは、“essential passions of the heart”を含めて “the primary laws of our nature” であるとした⁶⁾。イギリス以外の場所で、ロマン派の詩人たちが生きた時代とは別の時代で、イギリス・ロマン派の詩を読む読者にとって “our nature” とは何か。“our” とは誰か。詩の言語は異なる言語圏、文化圏を横断できるだろうか。このことを、以下でいくつか具体例をあげながら考えてみたい。

(2) エリオット、フライ、カラー

ワーズワスの序文の明らかなエコーは、エリオット (T. S. Eliot 1888–1965) の “The Social Function of Poetry” (1945)⁷⁾ にも聞こえる。エリオットは、“The Social Function of Poetry” で、ワーズワスの序文とかなり似た言葉を用いて、“the essential social function of poetry” について説明している。詩が与えるのは「喜び」であり (“we can be sure about is that poetry has to give pleasure” [18])、その「喜び」の表現について “there is always the communication of some new experience of something, or some fresh understanding of the familiar, or the expression of something we have experienced but have no words for, which enlarge our consciousness or refines our sensibility” と述べている (18)。しかし、エリオットは、この論考の目的は、個々の喜びの表現の仕方、それが個々の読者に与える喜びではなく、詩が “us collectively, as a society” に対して持つ役割、つまり、詩が複数の「私たち」からなる集合体である共同体に与える機能の重要性であると強調する (18)。

We observe that poetry differs from every other art in having a value for the people of the poet's race and language, which it can have for no other. That poetry is much more local than prose can be seen in the history of European languages. And this appears perfectly natural when we realize that poetry has primarily to do with the expression of feeling and emotion. . . . Therefore no art is more stubbornly national than poetry. (19)

エリオットは、詩とは、他の芸術の形態とは異なり、「散文よりもずっと地域的」 (“much more local than prose”) であり、その原因のいくらかは、「詩が、第一に、感情や感動の表

現と関係している」からであると説明する。芸術の特定の地域や時代を超える普遍的価値を考える場合に、同じ文字テキストを使う芸術——例えば、ある特定の時代背景の中に人物を描き込む小説——よりも詩が地域性に縛られるという発言は、すぐには首肯できないかもしれないが、少し考えれば、このような考え方は、ヨーロッパでは、ロマン主義時代に遡ることができることに気がつく。18世紀後半から19世紀前半のその時代は、文学・文化的にはロマン主義が国の枠組みを超えてヨーロッパ全土へ（多少の時間差があるが）広がる一方、政治的には、国民国家（nation-state）と「国」語・「国」文学が一つのセットになった時代であった。ワーズワスが、詩の根本としたものは、エリオットが主張するように、“English”（この英単語は、英語と英文学両方の意味がある）を、その言葉が公式の言語として話される国家に生を享けた人々のみが「私たち」のものと主張し、また、実感できるものなのか、そうでないのか。21世紀の現在、「国」文学と「外国」文学がロマン主義の時代よりもさらにその境界を曖昧にしつつあり、また、翻訳を通して異なる国、地域の、あらゆる時代の文学を自国語で読む機会がさらに増えていることを考えると、この問題は再考する必要があるだろう。

エリオット以降、この問題を考える手がかりとなるのは、文学や神話と社会との関係を重視したカナダ人ノースロップ・フライ（Northrop Frye 1912–91）の批評体系、特にフライの用いた“primary concerns”と“secondary concerns”の二分法、詩という形式を考える点では、カラー（Jonathan Culler 1944–）の抒情詩の理論であろう。

フライの後期の著作で何度も定義される“primary concerns”と“secondary concerns”の二分法は、フライが神話と文学の根本においた2分法である。最初にその定義が現れるのは、1983年のMLAの100周年記念大会での発表である。

[Literature develops out of mythology, a body of stories with a specific social function, and mythology in its turn is an outgrowth of concern, a term that I hope is self-explanatory. There is a primary concern, and there is a secondary concern.] Primary concern is based on the most primitive of platitudes: the conviction that life is better than death, happiness better than misery, freedom better than bondage. Secondary concern includes loyalty to one's own society, to one's religious or political beliefs, to one's place in the class structure, and in short to everything that comes under the general heading of ideology. All through history secondary concerns have had the greater prestige and power. We prefer to live, but we go to war; we prefer to be free, but we keep many people in a second-class status, and so on. (18: 293)⁸⁾

フライは、“primary concerns”を、すべての時代の全ての人々が共有できる、あまりにも当たり前すぎて話題にも上らないが非常に大切なもの——フライが挙げている例は基本的人権と生きるにたる生を実感させるものである——と考えており、そこから“secondary

concerns”が、国民国家が成立し、植民地主義、帝国主義が世界を席卷してゆく過程で、分割されてゆくと述べる。第二次世界大戦直後、エリオットは「詩の社会的役割」と特定の地域と言語との結びつきを強調し、現代のポストコロニアルの時代には、フライの言葉を使えば、“secondary concerns”、つまり、“loyalty to one’s place in the class structure, and in short to everything that comes under the heading of ideology” (Frye 18: 293: xvi) が、文学研究でも大きな問題として無視できなくなる。フライが MLA の年次大会で primary / secondary の区別について話したのは、サイド (Edward Said 1935–2003) の *Orientalism* (1979) の出版後、ある特定の場所、人間の出自、民族性、階級が規定するアイデンティティと文学との密接な関係を歴史的な文脈の中で捉える文学研究が大きな潮流になりかかっていた時であった。それから約十年後、西インド諸島で生まれ、カルガリーで英文学を講じたポストコロニアル文学の専門家のヴィクター・ラムラージ (Victor J. Ramraj 1942–2014) は、フライの “primary concerns” をワーズワスの (“essential passions of the heart” を含めて) “the primary laws of our nature” と極めて近いものと考えている (xvi)⁹⁾。

ワーズワスが “our nature” と書いたとき、彼はおそらく、フライが意識したように primary / secondary の階層を頭においていたとは思われないが、その一方で、彼の脳裏に、読者としてインド人や日本人が浮かんでいたとは思えない。しかし、ワーズワスが生きていた時代とは違って、20 世紀以降の英文学研究で “secondary concerns” が主に問題となるからと言って、“primary concerns” を根幹とするロマン派の詩は読まれない、研究もされないというわけでもない。また、ワーズワスが生きていた時代は、イギリスで生まれ育った読者、イギリス以外の場所で生まれた場合でもイギリス文学を伝統の一部と認識する読者が、イギリス・ロマン派の作品の読者の大半を占めていただろうが、現在は、イギリスの詩を「国」文学以外の作品として読む読者が世界中に存在する。しかも、イギリスからはるか遠くの地で、初めてイギリス・ロマン派の詩にふれる読者は、その出自をどこで持つか、どこでその作品を読むかによって、意識する “secondary” の性質が変わる。大きく分ければ、イギリス・ロマン派の受容の仕方には、少なくとも二通りある。大英帝国の負の遺産を背負っている植民地化された地域に生を受けた読者が感ずる “secondary” と、アルファベットの文字圏とは別の文化・文字圏に属し、直接的に植民地化の影響を受けなかった地域の読者が、前者とは違う意味で意識する “secondary” である。だが、フライが「イデオロギー」という言葉でまとめた secondary の部分以外の “primary” な部分、人の生が求める基本的な部分は、ワーズワスが “essential passions of the heart” と述べたものと直結するだろうから、そのような感情は、地域や時代を超えて共有できるだろうか、できるとすればどういう形でなのか。

この問題を考える場合、カラーが、古代ギリシアから現代のヨーロッパまでの抒情詩を俯瞰する『抒情詩の理論』 (*Theory of the Lyric* 2015) で主張している抒情詩の社会性を考察する意義は大きい。カラーは、作者と語りかけられる相手と読者の三角の関係のな

かで共感が醸成されることを重視している。

My account of the lyric grants major importance to its characteristic indirection, which I call ‘triangulated address.’: addressing the audience of readers by addressing or pretending to address someone or something else, a lover, a god, natural forces, or personified abstractions. (8).

孤独な精神の夢想や感情を表白する抒情詩が、他者に開かれ、共有されていくとすれば、エイブラムズ (M. H. Abrams 1912–2015) が “the greater Romantic lyric” と名付けた、ロマン派特有の自己発見を促す抒情詩「叙景—瞑想詩」においてもカラーの言う “triangulated address” が見られるはずであり (Abrams 77; Culler 8)、この三角形の関係の中に入る「外」国文学としてイギリス・ロマン派を読む読者が、いかに primary / secondary concerns を詩の中に読み取っていくのかを検証することは重要である。イギリス・ロマン派の詩に限らず、英詩の影響の研究は、英語圏の中で論じられてきたが、ここに、「正統な」継承からはみ出す継承者、読者を入れて考えることは、影響の研究に新しい地平を拓く。また、「英文学」研究の中で、「外国」文学として英詩を論じる視点を入れることで、英文学の新しい側面が見えてくるはずである。

フライもカラーも、ロマン派の詩にはあまりふれていないが、primary / secondary の区別は、それを区別しなかったワーズワスの序文が定義した詩の本質へと遡るので、本論は、ワーズワスの序文を出発点とし、イギリス・ロマン派の詩が、その詩が生まれた地とは別の場所で、英語を母国語としない読者に読まれた場合に何が起こるのか、具体的な事例を以下で考察する。

(3) ミーナ・アレクサンダーの感情の回復

ミーナ・アレクサンダー (Meena Alexander 1951–) は、研究者としては、イギリス・ロマン派研究を出発点としており、*Women in Romanticism: Mary Wollstonecraft, Dorothy Wordsworth, Mary Shelley* (1989) などの研究書を出版している。インドで生まれ、イギリスで学位を取り、故国で教鞭を取った後に渡米した。学者としては、現在はフェミニズムに軸を移しており、詩人、小説家、エッセイストとしても活躍している。英語で書かれたポストコロニアリズムの詩のアンソロジーには必ず作品が収録され、ポストコロニアリズム研究では、詩作品や、自伝的要素を多分に含む小説 *Nampally Road* (1991) の第5章 “Wordsworth in Hyderabad” が取り上げられることが多い。本論文では、アレクサンダーとイギリス・ロマン派との関わりが、アレクサンダーの学者、詩人、アクティヴィストとしての文筆活動の根幹を形成している点に注目し、幼少期からイギリスでの大学院時代に焦

点を当てる。

アレクサンダーは、1951年、インドのアラハバード (Allahabad) で、シリア系キリスト教徒の家に生まれ (Kafka 105)¹⁰⁾、Mary Elizabeth という名で洗礼を受けるが、15歳のときに自分で名前を Meena と変更し、コロニアリズムの軛から逃れ、本当の自己 “true self” を得た、と後に自伝『いくつもの亀裂』 (*Fault Lines* 1993) で述べている。アレクサンダーは、“Shelley’s India Territory and Text, Some Problems of Decolonization” (1996) という論文の冒頭のパラグラフで、インドのケララ州に住んでいた子供時代にシェリーの “Ode to the West Wind” や “To a Skylark” をどのように読んでいたかを以下のように回想している。

I never knew autumn as a child. The line “O wild West Wind, thou breath of autumn’s being” evokes for me the scents of the monsoon wind blowing in from the west, from the Indian Ocean and the Arabian Sea. For I first heard Shelley’s poetry, fragments of his lyrics, recited to me when I was a child growing up in Kerala, on the southwest coast of India. Lines from “Ode to the West Wind” or others from “To a Skylark” seemed then to me to be Indian poems, part of the same world of utterance as the words of Tagore or Mahakavi Vallathol. And if there was a difference in the language that worked the textures of sound and sense—illuminating the images of wind, water, cloud, leaf, bird—then it was nothing particularly to be remarked on. For English then was braided in for me with Indian languages: Malayalam, my mother tongue, and others, including Tamil, Hindi, Marathi, and phrases of Bengali. (169)

多言語が日常的に使われ、英語がインドのいくつかの方言とともにアレクサンダーの母語の一部となっていた状況を脇に置けば、彼女が朗読された「西風へのオード」を自分の住む土地の「西風」と結びつけて感覚的に受容する体験——「西風」は、フィレンツェ近郊のアルノー川の川縁の森に吹く西風ではなく、インド洋とアラビア海から吹く「西風」(モンスーン)として体験されている——は、おそらく、英文学の授業を受けてシェリーやこの詩の成立状況を知る前にこの詩を体験する読者と共有される体験であろう。まだ詩の成立の背景を知る前にこの詩を読む、あるいは聴いた読者が——日本語でこの詩を初めて知る読者であれ、イギリスの英語が母語の読者であれ——このような体験をするとき、詩は、primary / secondary という階層に分けて受容されるわけではないのだろうか。しかし、読んだ作品が、外国語で書かれている、自分の所属する文化とは別の文化圏のものであると意識した場合、その体験の在り方は変化するだろうか。

アレクサンダーの自伝には、「西風へのオード」や「ひばりへ」を知ったときの体験は具体的には書かれていないが、おそらく5歳ぐらいであっただろうと考えられる。5歳のときに、父親がイギリスから独立したばかりのスーダン政府に招聘されて、家族でア

ラビア語圏のスーダンへ移住しているからである。しかし、しばしば里帰りをしているので、もう少し年齢があがったときの体験（5歳から11歳の間）かもしれないということはあるが（*Fault Lines* 70-72）、言語や文学への感性が鋭く、また非常に早熟であったアレクサンダーは、スーダンで“unlearn her languages”の体験をすることになるので、上記の論文の中で思い起こされている子供時代の詩的体験はスーダンで永遠に失われることになる（169）。就学以前のアレクサンダーは、ポートスーダンで、まず、“a British tutor”から徹底的に英語を矯正されてから、6歳でイギリス人の子供たちが通うインターナショナルスクールに最初の白人ではない生徒として入学する（169）。この英語の個人教授の“strict colonial pedagogy”は、英語に階層があることを5歳の子供の体に覚え込ませるコロニアルな体験となる（“her utterance was superior to mine. Carefully, with great patience, she made me unlearn the English I already knew” [169]）。自分の一部となっている言語を“unlearn”する学習がどれほど暴力的な痕跡を残すかが彼女の自伝の大きなテーマなのだが、子供時代のアレクサンダーには自分の言語習得で起こっていることの意味が（まだ）理解できないまま、身体的不快感、苦痛として認識されている。

Sometimes I felt as if a thick skin, an otherness, had covered over the poetry I loved, and I struggled in a dim, wordless way to return to a landscape of sense, a complex, interanimating realm of linguistic recognition that was starting to alter beyond my understanding. (170)

アレクサンダーがインドにいたときには、英語は、母語やヒンディー語と並列して使う言語のひとつであった。ところが、ハルツーム（Khartoum, スーダンの首都）では、5歳の子供にとって、英語は母国の言語環境から切り離されて、学びなおさねばならないものとなった。しかも、英語は、最も重要な言語であるにもかかわらず、彼女の一部ではなく、彼女を常にその外側のアウトサイダーとして認識させる言語となるのである（“it was the most important one and I was an outsider confronting it” [111]）。

この苦しみの中であがいている青春時代のアレクサンダーにとって助けになったのは、インドの文学でもスーダンの文学でもなく、イメージと言葉の本質探り、その探求の底に革命的な知識を求める気持ちを潜ませていたイギリス・ロマン派の詩と散文であった。

In my teenage studies I was deeply attracted to the poetry and prose of the English Romantics, whose intense, even tormented probings into the nature of image and language were underwritten by the call for a revolutionary knowledge. (*Fault Lines* 118)

特に、ハルツームで初めて読んだコウルリッジ（Samuel Taylor Coleridge 1772-1834）は彼女に大きな影響を与えた。

I will never forget the first time I read Coleridge. It was in Khartoum, and I carried with me the magical thought of what he, borrowing from Schlegel, developed as the notion of organic form, the idea that any living existence, a cloud, a plant, a poem, a person, might have its own unique inner teleology, apparent only in the flowering of the fullest form, a logic, a *svadharma* that could not be questioned. Given this, no one could say: you're all wrong, you don't do things right, you Don't get the final syllable in the stanza right. (118)

しかし、この解放的な思考さえ英語で得られるという矛盾がある。

Yet even as these liberating thoughts came to me in English, I was well aware that the language itself had to be pierced and punctured lest the thickness of the white skin cover over my atmosphere, my very self. The language I used had to be supple enough to reveal the intricate mesh of otherness in which I lived and moved. (118)

この矛盾は、自分の「他者性」をいやおうなく認識させる「英語」で綴られているにもかかわらず、その「他者性」の解放を可能にするテキストの研究へと彼女を誘う。ワーズワスが“the primary laws of our nature”と言ったものを、アレクサンダーは、英語と格闘しながらわかりにくい言い方で述べている。アレクサンダーにとって、イギリス・ロマン派の作品とは、英語の外側にいる者にも“the primary laws of our nature”を共有させるテキストである。しかし、それは、天与の物ではない。“the inner form”を語ることができる詩的言語、“the language reserved for passion”は、「他者性」を強いられた者には身を引き裂く言語との格闘を経てのみ手に入れられるものとして現れるのである。

The inner form had a logic so powerful it was best spoken of in the language reserved for passion and it tore through the mesh of decorum, of the principled order the disparate social worlds had established. (118)

十代後半のアレクサンダーは、イギリス・ロマン派の中に他者性の網に絡め捕られた自己の言語を解放する可能性を示唆する何かを認め、ロマン派を研究の対象に選択することになる。18歳でイギリスのノッティンガム大学の博士課程に入学を許可されると、アレクサンダーは、ハルツームからイギリスへと場所を変え、ロマン派の self-identity の確立について博士論文を書き始めるが、ロマン派の self-identity の研究が、自分の内面の時間と意識の関係を見つめ直すことに必然的になるため、深刻な精神的危機を迎える。

My research into the structures of Romantic self-consciousness, into the refined articulations

of internal time-consciousness, had led me here. I did not know who I was. I felt as if I were paying with my life. (*Fault Lines* 139)

この精神的危機から彼女を救うのが、彼女にとっては異国のイギリスの田舎とワーズワスの『序曲』(*The Prelude* 1805)であることは重要である。読むことも書くこともできなくなったアレクサンダーは、ハンブシャーの田舎の家に住む友人の親族に引き取られて療養する。“When I am able to read I want to read this first”と心に決めて、ワーズワスの『序曲』だけを携え、初めての土地へ向かって数週間後、森の端に寝転がって、『序曲』のページを開く時が訪れる。(*Fault Lines* 142)。

I opened a page of *The Prelude*—this was after two months of being unable to read—and miraculously found my eyesight clarified, sharpened to the syllables of the poem. Somewhere towards the end of Book One of the 1805 text is where my gaze fell, but quickly shaking fingers I turned to the eleventh book, lines I had long loved, and I repeated them over to myself: “So feeling comes in aid / Of feeling, and diversity of strength / Attend us, if but once we have been strong.” I wondered at the sudden infusion of vigor I felt, and a trembling pleasure, as if it were my own past that was on the brink of being restored. Slowly, but certainly, my eyes gained strength. (142–43)

『序曲』、あるいは、ワーズワスの作品を読んで精神的危機を乗り越える体験は、ミル(John Stuart Mill 1806–73)、あるいはイギリス人だけに限られるわけではないことがアレクサンダーの体験からわかるが(Mill 113)、アレクサンダーがここで読みたかった引用の部分(bk.11 325–27)は、“the visionary dreariness”の描写(11: 305–15)に続く、ワーズワスとその風景の思い出(とそれを詩にすること)から自己の感情と思考の統一をはかる部分である。

And think ye not with radiance more divine
From these remembrances, and from the power
They left behind? So feeling comes in aid
Of feeling, and diversity of strength
Attend us, if but once we have been strong. (11.323–27)

アレクサンダーが引用した行の直前には、疑問文が置かれている。この疑問文の呼びかけが、複数形の“ye”であることは大変重要である。複数形の二人称が使われることによって、読者は、この詩が語るワーズワスの詩人としての成長の物語の中の登場人物で

はなく、その物語に組み込まれずに外にいるままでありながら、この詩の感情の回復の過程に引き込まれ、この詩の存在理由の一部になる。“So”で始まるワーズワス自身が語るこの疑問文への答えは、直前の部分と同様、現在形で書かれ、さらに、ワーズワス自身の感情の回復の物語であれば一人称単数の me が使われるところに“us”が現れ、読者自身の存在理由と感情の回復も同時に肯定されるのである¹¹⁾。

アレクサンダーは、インドで過ごした幼少期の多言語的環境、内的言語（思考）と言語、外的風景が交流する複雑な（精神的）風景をもう一度取り戻すために、英語という支配的な言語にあって、言葉を失いながら（“I struggled in a dim, wordless way”）、“a landscape of sense, a complex, interanimating realm of linguistic recognition that was starting to alter beyond my understanding”へと帰還する道を探っていた（*Fault Lines* 170）。その最初の道標が、イギリス・ロマン派の詩や思想であり、彼女の精神と感情の回復に『序曲』が大きな助けとなった。彼女を覆った「他者という、もう一枚の厚い皮」（“a thick skin, an otherness”）を切り裂いて内面の核へと到達させるイギリス・ロマン派の詩的言語は、英語でありながら、支配者の言語である暴力的な英語（“the violence of colonial language, its canonical burden, part and parcel of the territory of empire”）に対抗する術を彼女に教えるのだが、その新しい英語を身につけるために、アレクサンダーは再び“unlearn”する体験を経ねばならなかった（170）。ポーツマスで支配者の言語を手に入れるためにそれまでの知識、言語を“unlearn”したように、イングランドからインドに帰還したとき、アレクサンダーは、イギリスで学んだことを“unlearn”するのだ。“Returning to India after my studies in Britain, as a grown adult in 1973, I had to unlearn my tortuous academic knowledge, remake myself, learn how to read and write again as if for the first time”（142）。

アレクサンダーは、その後、インドからアメリカに移住し、学問の世界に半分だけ軸足を置き、詩人、文筆家として旺盛な執筆活動を行っている。前述した“Shelley’s India: Territory and Text, Some Problems of Decolonization”という論文は、彼女が研究者として、イギリス・ロマン派の詩が、詩の社会的役割と primary concerns の実現をイギリスとは文化も風習も異なる社会で実現させたことを論証している。シェリーの「西風へのオード」や『プロメテウス解縛』（*Prometheus Unbound* 1820）が、19世紀中葉から20世紀のインドの独立への闘争の中で、いかに読まれ、暴力的な支配の言語を覆したかを跡づけたこの論文は、イギリス・ロマン派の詩の本質が、イギリスが征服した異文化の社会で、抑圧の軛を外す原動力になったことを示した。イギリス・ロマン派の研究は、“tearing apart colonial territory and poetic text, then setting them side by side, in a postcolonial project of rereading”（“Shelley’s India: Territory and Text, Some Problems of Decolonization” 170）というやり方で、19世紀前半のイギリスと現代の様々な場所を結び、様々な社会で新しく詩の社会的役割、個々人の生の充足を考え、実現する契機となり得るのである。

アレクサンダーの幼少期の多言語的空間の中で「わたしたち」の一部となっていたシェ

リーの抒情詩は、支配者の英語が（被支配者の英語を含めて）他の言語の上位に君臨するモノリンガルな世界では、“unlearn”の体験を経て「わたしたち」から一度分離してしまう。イギリス・ロマン派の詩を読むことで、これをもう一度「わたしたち」に接合したとき、イギリス・ロマン派の詩は別のコンテキストと風土の中に、その中核の思想と詩語を残したまま接続され、新しいコンテキストの中を生きることになる。アレクサンダーの詩作品には、英語で書かれたポストコロニアル文学の作品という枠組みには収まり切れない作品がある。例えば、『識字できない心』(Illeterate Heart [2002]) に収録された“Daffodils”という作品は、アレクサンダーの経歴を知る読者がタイトルだけ見れば、世界に拡散したイギリス・ロマン派の詩の中でも最も有名な詩の一つであるワーズワスの「水仙」(“Daffodils”)の残響を響かせポストコロニアリズムの枠組みのなかでロマン派を取り扱う詩であることを予測させるかもしれない。そして、十分にそのことを知っているアレクサンダーは、その水仙の残響の中で、新たな水仙の花を開かせる。自分の“Daffodils”を“Kasuya Eiichi, poet of Japan, / knows a place where daffodils bloom” (1-2) とはじめるのである。“Kasuya Eiichi”とは、日本の代表的な現代詩人のひとり、粕谷栄一(1934-)であり、アレクサンダーの詩が言及しているのは、粕谷の第一詩集『世界の構造』(1971)所収の「私以外には、誰も知らない。遙かに、夥しい水仙の咲くところを、私は知っている」と始まる散文詩「水仙」(14)である¹²⁾。粕谷は、茨城県古河町以外の場所に住んだことのない、散文詩しか書かない詩人であるという点で(「わが町」86)、アレクサンダーとは非常に対照的な詩人である。粕谷の「水仙」の引用した冒頭は、ワーズワスの「水仙」を思い起こさせるが、続く部分はワーズワスとは全く違う水仙を提示している。この点については、本文で後述するが、ワーズワスの湖水地方の黄金色の水仙は、イギリスから遙か離れた様々な場所で、時代を変え、言語の壁も横断して読まれていく中で、その primary concerns を抱えたまま驚くべき変貌を遂げるのである¹³⁾。次のセクションではこのことを日本での受容を例として論じる。

(4) 夏目漱石と粕谷栄市の花

アレクサンダーは、最終的には、詩的言語として英語を用いることを選択したが、イギリス・ロマン派の詩が別の場所で読まれる例を、ここでは、非英語圏の植民地化されていない場所として日本の場合を検討し、夏目金之助(漱石 1867-1916)と粕谷栄市を中心に考察したい。植民地の国語教育として「英」文学がカリキュラムに早くから入ったインドの事情とは異なるが、日本では、帝国大学文科大学(東京大学)が1887年に英文学科を設立し、英語で教育を行ったので、イングランドの歴史の古い大学に先駆けて、大学の制度の中での英「文学」研究が確立している¹⁴⁾。夏目金之助(漱石)は、学部で、ディクソン (James Main Dixon 1856-1933)、ウッド (Augustus Wood 1855-没年不詳) から

教育を受け(亀井5-22)、早くから英詩に親しんでいたが、大学院在学時の1894年9月4日、正岡常規(子規、1867-1902)宛ての手紙で、「勉強の出来ぬは実心苦しき限り」である中で、「只「シエレー」の詩集一卷は、繰り返して「或部分を熟読致し大に愉快を覚え候」と書き、心の不快が頂点に達したときにシェリーを読むことで精神が開け、気分が落ち着きつくことを、「折忽ち脳中の靈火炎上して一路通天の路を開き或る「プリ〔ン〕シプル」を直覚的に感得したる如き心地致し大に胸中落付候」と述べている(『漱石全集』22:70)¹⁵⁾。英文学研究の苦しみ中でシェリーの詩が金之助を救っているのだが、シェリーの詩想と自分の考えが合致し、「天外亦此同情の人あるかと大に愉快に在候故に御座候」とまで言っている(『漱石全集』22:70)。

しかし、金之助は、世紀の変わり目に英語研究のためにイギリスに官費留学して孤独なロンドンでの生活を送る中、さらに深刻な精神的危機を迎える。ロンドンの金之助は、自分がイギリス人とは異なる肌の色と低い身長を持つことに非常に苦しみ、日記や「倫敦消息」にそのことを何度か記している。「往来ニテ向フカラ脊ノ低キ妙ナキタナキ奴ガ来タト思ヘバ我姿ノ鏡ニウツリシナリ、我々ノ黄ナルハ当地ニ来テ始メテ成程ト合点スルナリ」(19:44「日記二」)¹⁶⁾。黄色は、留学前の漱石の創作(漢詩、俳句)において、非常に重要な色であり、鮮やかな黄色が漱石独特の使い方と頻繁に現れる¹⁷⁾。肌の色に黄色を用いた例としては、学生時代に子規に送った旅行記『木屑録』(1889)の中の七言絶句で、毎日海で泳いで健康的に日焼けした顔の色に「黄」を用いて「顔黄」という造語を用いている。高島俊男は、『木屑録』の「顔黄」や「面膚漸黄」という表現を、中国詩の伝統にない「どうも変な感じ」のする拙い作詩であると述べ、子規がこの作の下手さに捧腹絶倒したエピソードを紹介しているが(204-9)、日焼けした肌、輝く花などに漱石が使う黄色は、漱石が早くから親しんだ漢詩にも専門として英文学の詩にもそれほど使われない印象的な使い方と、漱石は彼の創作に影響を与えた、二つの異国の文学伝統とは異なる色の使い方を自分の韻文の創作の中心に置いていた。その色が、ロンドン留学中に不快な色となる。1901年4月9日の日記をまとめた「倫敦消息」(「其二」)では、「黄色人とは甘くつけたものだ。全く黄色い。日本に居る時は余り白い方であないが先づ一通りの人間色といふ色に近いと心得て居たが此国では遂に人間-を-去-る-三-舎-色と言はざるを得ないと悟った」と書いている(『定本漱石全集』12:14)¹⁸⁾。漱石は、自分の肌の色を人間の肌の色ではないと感じており、孤独な留學生活の中で、大きな精神的危機を迎えることになる。

漱石のこの精神的な危機は、自身も異国での生活を経験した20世紀の詩人、小説家の創作意欲を刺激することになる。日本を含むいくつかの非英語圏の国で教鞭を取った経験のあるイギリスの詩人スウェイト(Anthony Thwaite 1930-)は、“Soseki (London: December 1901)” (1984) で、この時期の漱石の精神の危機にドラマティック・モノローグで迫るが、漱石を12月の暗い夜の絶望の中に置いたまま、救いを与えない¹⁹⁾。辻邦生

(1925-99) は、「野分のあと」で、主人公の「先生」に、ロンドンの眠れぬ冬の夜を幾夜も「窓際にへばりついて過ごした」後に、「息がつまりそう」な「美しい色」を見せ、地上にあるこのような美しさのために地獄を引き受ける決意をさせる (399-400)²⁰⁾。辻邦生の掌編では、熊本時代の友人から「君の句は、そういえば、色彩感覚に溢れていたな」と言われる「先生」がロンドンで見た息が詰まりそうな美しい色は、「精神の美」となる朝日に映えて「薔薇色に染まる霧」であるが (308, 406)、筆者は、漱石がロンドンの下宿で孤独に読んでいたロマン派の詩、特にキーツの詩に現れる黄色が、漱石の危機を救い、新しい文学的創造へと誘ったと考える。

漱石の 1901 年 2 月 13 日の日記は、キーツからの引用で締めくくられる。

And on the bank a lonely flower he spied,
A meek and forlorn flower, with nought of pride,
Drooping its beauty o'er the watery clearness,
To woo its own sad image into nearness.

—Keats.

面白キ句ナリシ故此ニ書キタリ
(『漱石全集』19: 55「日記二」)

漱石が引用しているのは、キーツの「小高い丘で爪先立ちして」(“I Stood Tip-toe upon a Little Hill” [1817]) の 171 行目から 174 行目である。ここに描かれる水辺の寂しい花を、10 日後の 2 月 23 日の高浜虚子 (清 1874-1959) 宛ての葉書に書かれる「見付けたる堇の花や夕明り」(『漱石全集』22: 2345, 17: 341 no. 1806) と直接結びつける解釈があるが (江藤 110-11; 池田 145-47)、引用箇所は、「爪先立ち」して詩のヴィジョンを求めている語り手の詩人 (= 背が低いキーツ) が、水辺に咲く花を擬人化してナルキッソスの神話を初めて詩とした詩人の動機をさぐる部分の中にあり、水鏡に映る自分を悲しげに眺めて項垂れていると擬人化されて描写される花は、神話の美少年以外の姿をヨーロッパ人ではない読者に見せなかったか。1 月に鏡に映る自分の姿を「脊ノ低キ妙ナキタナキ奴」と書き、「キタナキ」色として「黄」を認識せざるをえなかった漱石に、キーツの孤独なおとなしい黄色の花は、「面白キ」という印象を与える (『漱石全集』19: 44, 55「日記二」)。ここから漱石は、同時期に読んでいたシェリーの『プロメテウス解縛』の堇のイメージをバネに、下を向いていた眼を上げることになる。

自分の水鏡の像を見ているキーツの項垂れた水仙の眼 (eye=I でもある) に対して、『プロメテウス解縛』の最終幕第 4 幕で、シェリーの堇は、その眼を蒼空へと向けている (“a violet’s gentle eye / Gazes on the azure sky / Until its hue grows like what it beholds” [4: 485-87])。この二つのロマン派の花から、漱石は、人の眼を空に向ける新しい黄色の花を創り出す

ことになる。イギリス留学から戻り、1903年に東京帝国大学の英文科の講師となった漱石が、研究者兼小説家という二足の草鞋を履いて、1906年に発表した『草枕』の第11章には、画工の忘我の境地に運ぶ大きな木蓮の木に無数に咲く花が描かれる。

此遥かなる下から見上げても一輪の花は、はつきりと一輪に見える。其一輪がどこ迄〔むら〕簇がつて、どこ迄咲いて居るか分らぬ。それにも関〔かかわ〕らず一輪は遂に一輪で、一輪と一輪の間から、薄青い空が判然と望まれる。花の色は無論純白ではない。徒らに白いの〔さむ〕は寒過ぎる。専〔もっぱ〕らに白いの〔さむ〕は、ことさらに人の眼を奪ふ巧みが見える。木蓮の色は夫ではない。極度の白きをわざと避けて、あたゝかみのある淡黄に、奥床しくも自らを卑下して居る。余は石甃〔いしだみ〕の上に立つて、此おとなしい花が累々とどこ迄〔くうり〕も空裏〔はびこ〕に蔓〔はびこ〕る様を見上げて、しばらく茫然として居た。（『定本漱石全集』3: 134）

キーツの「小高い丘で爪先立ちして」において項垂れていた孤独な黄色の花、シェリーの『プロメテウス解縛』の空を凝視する堇の眼、漱石自身の夕明かりの中に咲く堇の花の先に、「あたゝかみのある淡黄」の「奥床しくも自らを卑下して居る」木蓮の花が空まで無数に連なっている。

天と地を繋ぐ無数の黄色の花のイメージは、英文学の中では、ワーズワスが銀河の比喩を使った第2連を新たに加えた4連版の「水仙」（“I wandered lonely as a cloud” [1815]）がすぐに思い浮かぶが²¹⁾、漱石の『草枕』では、黄金の花弁を振り乱して踊り、詩人に同化を誘う水仙は、「ウオーズウオースの如く」、「一団の水仙に化して、心を沢風の裏〔たくふう〕に撩乱〔うち〕せしむる」と評されている（『定本漱石全集』3: 73）。「おとなしい花」の累々と空を埋める静かな迫力は、陽気に踊るワーズワスの黄金色の水仙とは全く異なる。そこには、孤独な漱石が、イギリス・ロマン派的な孤独な抒情の一人称へと逃避するのではなく、その孤独な抒情をスプリング・ボードとして、ロンドンの孤独な生活の精神的危機からの脱出口を見つけ、イギリス・ロマン派の詩を、日本の全く新しい詩的小説の中で開花させたことが示される。そしてこの、淡黄の木蓮の花と「心を沢風の裏〔たくふう〕に撩乱〔うち〕せしむる」ワーズワスの踊る黄金の水仙の花が、粕谷栄市の「水仙」の遠い源泉となり、それが、異なる言語の境界を越えてアレクサンダーの水仙にインスピレーションを与えるのを見るとき、21世紀に生きる私たちは、国民国家とセットとなった一つの言語の中で形成される詩の伝統の枠を超え、ポストコロニアルな場の“secondary concerns”も超え、韻文と散文の区別も超えて、primary concernsへと届く詩的言語の伝統が紡がれてゆく例の一つを目撃するのである。

(5) 結論

イギリス・ロマン派の詩の特徴として、エイブラムズの言うように、自己を発見するための精神的放浪が、内面の危機の瞬間を経て、一段高い精神の統合へと向かうというパターンがあるとするれば、その感情と思想の統合を実現する旅の行程は、カラーの抒情詩の理論で述べられる抒情詩の社会的な機能に着目することによって、作者の語り手の詩人だけでなく、読者の精神的危機を救い、primary concerns を充足させることがわかる。そのとき、抒情詩が形成する社会的な場が必ずしも特定の文化へと閉じないことは、アレクサンダーの『序曲』の読書体験を考えれば明らかである。

このような体験が可能になるとき、primary concerns / secondary concerns の区別、文学ジャンルの相違はどうなるのか、が次に問題になるが、筆者が用いたアレクサンダーの散文の伝記と詩、漱石の韻文（漢詩と俳句）と散文の小説、粕谷栄市の散文詩、という一見ランダムで恣意的に見える例を支持するような理論、批評的枠組みはあるだろうか。

本論がここで取ろうとしているのは、ラマザーニ (Jahan Ramazani 1660-) の『ハイブリットな詩女神——英語で書かれたポストコロニアルの詩』(*The Hybrid Muse: Postcolonial Poetry in English*, 2001) よりもさらに広い射程である²²⁾。通常の意味での「ポストコロニアル詩」という枠組を越えるために、同じポストコロニアル批評の分野の中でラムラージがフライとワーズワースを結び付けて論じたことにヒントを得て、ここでは、フライの「詩的言語」の定義とイギリス・ロマン派の作品を結び付けて考えたい。フライは、シェイクスピア (William Shakespeare) の『ヘンリー 5 世』(*Henry V*) を例として、primary concerns と secondary concerns は区別できないものであり、どちらかが、どちらかの上に書かれたパリンプセストではなく、作品の primary concerns を読み進めていく中で、そのイデオロギー的な側面である secondary concerns が識別できるようになるのだと言い、賛同できるかどうか別であるが、と留保をつけて、primary concerns を表現する言語は、“poetic language” であると述べている。フライの定義では、“poetic language” とは、韻文という文字テキストの形式ではなく、韻文でも散文でも primary concerns を表現する言語なのである。

a poetic language, which not only is different from ideological language but puts up a constant fight against it to liberalize and individualize it. There is no such thing as a pure myth. . . . Myth exists only in incarnations. But it's the ones that are incarnated in works of literature that I'm primarily interested in, and what they create is a cultural counter-environment to the ones that are—I won't say perverted—but at any rate twisted or skewed into ideological patterns of authority. (24: 950, Cayley 90)

ワーズワスが“the primary laws of our nature”という言葉で夢見たのは、人間の primary concerns を充足させるような詩的言語であり、それは、イギリス・ロマン主義の思想／詩想を表現する韻文、散文の両方の根幹にあるものである。それは、イギリスの社会、文化の中だけに閉じて、「国」文学、あるいは支配者の言語として植民地に押しつけ得る「国」文学、英語文学という枠組みの中に囲い込むことが可能なものではない。囲い込めば、その枠組みに囲われて抑圧された primary concerns を実現するために、囲いの内側から囲いを壊す原動力となり、囲いの外部の地域、社会に受容されれば、その場所の primary concerns を充足させるための新しい詩的言語を生み出す力となり得るものである。そうであるとすれば、イギリス・ロマン派の文学を、外国文学として研究する地域では、イギリスのロマン派研究とは別の地平から、イギリス・ロマン派の文学が与える影響の問題を観測することができる。そして、「新しい星」を発見し、イギリス・ロマン派研究の「国」文学、「外国」文学の境界を越境して、文学研究をより豊かにすることが可能なのだ。

*本論文は、日本英文学会第90回大会での口頭発表を加筆修正したものである。司会をしてくださった大河内昌先生をはじめ、質問、コメントをいただいた方々に感謝する。

Works Cited

- Abrams, M. H. *The Correspondent Breeze: Essays on English Romanticism*. New York: Norton, 1984
- Alexander, Meena. *Fault Lines: A Memoir by Meena Alexander*. New York: Feminist P at the City U of New York, 1993.
- . *Illiterate Heart*. Evanston, Ill.: Triquarterly, 2002.
- . “Shelley’s India: Territory and Text, Some Problems of Decolonization” (*Shelley: Poet and Legislator of the World*). Ed. Betty T. Bennet and Stuart Curran. Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 1996. 169–78.
- Ashley, M. P. “Brock, Arthur Clutton- (1868–1924), essayist and journalist.” Oxford Dictionary of National Biography. September 23, 2004. Oxford UP. Date of access 7 Oct. 2018.
- Carley, David. *Northrop Frye in Conversation*. Toronto: Anansi, 1992.
- Clarke. Charles Cowden, and Mary Cowden Clarke. *Recollections of Writers*. London: Cantaur, 1969.
- Clutton-Brock, Arthur. “A New Planet.” *Times Literary Supplement*. No. 826. Nov. 15, 1917. 545–46.
- Culler, Jonathan. *Theory of the Lyric*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2015.
- Eliot, T. S. *On Poetry and Poets*. 1957. London: Faber and Faber, 1979.
- Frye, Northrop. *Interviews with Northrop Frye*. Ed. Jean O’Grady. *Collected Works of Northrop Frye* vol. 24. Toronto: U of Toronto P., 2008.
- . *The Secular Scripture and Other Writings on Critical Theory, 1976–1991*. Ed. Joseph Adamson and Jean Wilson. *Collected Works of Northrop Frye* vol. 18. Toronto: U of Toronto P., 2006
- Gray, Basil. “Waley [formerly Schloss], Arthur David (1889–1966), translator of Chinese and Japanese

- literature.” *Oxford Dictionary of National Biography*. September 23, 2004. Oxford UP. Date of access 7 Oct. 2018.
- Kafka, Phillipa. *On the Outside Looking In (dian): Indian Women Writers at Home and Abroad*. New York: Peter Lang, 2003
- Keats, John. *John Keats: Complete Poems*. Ed. Jack Stillinger. Cambridge, MA.: Harvard UP, 1982
- . *Letters of John Keats 1814–1821*. Ed. Hyder Edward Rollins. 2 Vols. Cambridge, Mass. Harvard UP, 1958
- Mill, John Stuart. *Autobiography and Literary Essays*. Ed. J. M. Robson and Jack Stillinger. *Collected Works of John Stuart Mill*. Vol. 1 Toronto: U of Toronto P, 1981.
- Jahan Ramazani. *The Hybrid Muse: Postcolonial Poetry in English*. Chicago: U of Chicago P, 2001.
- Ramraj, Victor J. “Introduction to the First Edition.” (1995) *Concert of Voices: An Anthology of World Writing in English*. 2nd ed. Ed. Victor J. Ramraj. Peterborough, On.: Broadview, 2009. xv–xviii.
- Rollins, Hyder Edward. “Introduction: Keats’s Letters and Their Editors.” *Letters of John Keats 1814–1821*. Ed. Hyder Edward Rollins. Vol. 1. Cambridge, Mass. Harvard UP, 1958. 3–15.
- Rzepka, Charles. “Cortes or Balboa, or Somebody Like That: Form, Fact, and Forgetting in Keats’s ‘Chapman’s Homer’ Sonnet.” *Keats-Shelley Journal* 51 (2002): 35–75.
- Wordsworth, William. *Poems*. Ed. John O. Hayden. 2 vols Harmondsworth: Penguin, 1977.
- . *The Prelude 1799, 1805, 1850: Authoritative Texts Context and Reception Recent Critical Essays* Ed. Jonathan Wordsworth, M. H. Abrams, and Stephen Gill. New York: Norton, 1979.
- . *The Prose Works of William Wordsworth*. Ed. J. B. Owen and Jane Worthington Smyser. 3 vols. Oxford: Clarendon, 1974.
- , and Samuel Taylor Coleridge. *Lyrical Ballads*. Ed. Michael Mason. 2nd ed. Longman Annotated Texts Series. London: Pearson, 2007.
- アルヴィ宮本なほ子 「漱石の淡黄の花——『草枕』とイギリス・ロマン主義」 『比較文学研究』 103 (2017): 7–38
- 池田美紀子 『夏目漱石——眼は識る東西の字』 東京：国書刊行会、2013.
- 江藤淳 『漱石とその時代 第二部』 東京：新潮社、1970.
- 隠岐さや香 『文系と理系はなぜ分かれたか』 東京：星海社、2018.
- 亀井俊介 『英文学者夏目漱石』 東京：松柏社、2011.
- 高島俊男 『漱石の夏やすみ』 東京：筑摩書房、2007.
- 辻邦生 『黄金の時刻の滴り』 東京：講談社、2017.
- 夏目漱石 『漱石全集』二十八卷、別巻一。東京：岩波書店、1993–99.
- . 『定本漱石全集』二十八卷、別巻一。東京：岩波書店、2016–.
- 粕谷栄市 『粕谷栄一詩集』 東京：思潮社、1976.
- 和田利男 『漱石の詩と俳句』 東京：めるくまー社、1974.

注

- 1) 1816年10月執筆。初出は *The Examiner* の12月1日号。翌年、キーツの詩集 *Poems* に収録。この作品の執筆の経緯は、友人の Charles Cowden Clarke によってキーツの死後明かされている。キーツはクラークと George Chapman の英訳 *The Whole Works of Homer* (1614) を読み、翌朝にこのソネットをクラークの家に届けている (Clarke, *Recollections of Writers* 128–30)。
- 2) キーツが1531年に太平洋を発見したバルボア (Vasco Nunez de Balboa 1475–1519) をコルテスと間違えたことを最初に指摘したのはテニソンだが、コルテスのメキシコ征服とキーツ

の文学的野心を重ね合わせ、歴史的文脈で考察する論文としては、Charles Rzepka の論文を参照。

- 3) 1902年創刊の *TLS* の初期の成功の多くは Clutton-Brook に負っている。Clutton-Brook については、M. P. Ashley, “Brock, Arthur Clutton- (1868–1924), essayist and journalist.” *Oxford Dictionary of National Biography* . September 23, 2004. Oxford UP., Date of access 7 Oct. 2018. *Oxford Dictionary of National Biography* については、本文中では、以下 *ODNB online* と略記。
- 4) ウェイリーについては、*ODNB online* の Basil Gray, “Waley [formerly Schloss], Arthur David (1889–1966), translator of Chinese and Japanese literature” を参照。ウェイリーは、中国語と日本語を独学で学び、1916年までに52篇の中国詩を翻訳し、1917年から1918年にかけてさらに翻訳を進めた。
- 5) パウンドの中国詩の英訳 *Cathay* は日本経由である。
- 6) *The Prose Works of William Wordsworth* ed. W.J.B. Owen and Jane Worthington Smyser, vol. 1 59–60. 以下、*Prose Works* と略記。1800年版にはこの記述はない (*Prose Works* 1: 22, 24)。
- 7) 1945年パリでの講演の後、John Middleton Murry が編集していた *The Adelphi* に掲載。本論では、*On Poetry and Poets* (1957) から引用する。
- 8) フライの著作は、フライの全集から引用する。初出は、*PLMA* 99 (1984): 990–95. 全集第18巻の14章に“Literary and Linguistic Scholarship in a Postliterate World” (18: 290–98) として収録。
- 9) ラムラージが編集した英語で書かれたポストコロニアル文学のアンソロジー *Concert of Voices* (1995) にラムラージがつけた序文 (xxvii–xxx) は、このアンソロジーの第二版 (2009) にも再録されている。本論では、この第二版に再録された序文から引用する。
- 10) アレクサンダーの母方の祖母 Elizabeth Kururilla は、ガンジーの熱烈な支持者で、トラヴァンコール州 (Travancore 現在のケララ州の一部) の最初の女性議員であった (Kafka 105)
- 11) この部分は、1805年版だと、“those two dear ones”である未来の妻 Mary Hutchinson と Dorothy へ呼びかけなのだが、1850版では Dorothy は消去され “the loved one at my side” となるので、複数形の *ye* は意味が曖昧になる。『序曲』は、友人コウルリッジに宛てて書かれた会話詩が、非常に長くなって別のジャンルへと変化したものと考えることができる。その意味では、作品内の物語の構成からは、二人称の呼びかけは、コウルリッジや妹のドロシーなどワーズワスの親しい家族や友人を意図したものと考えることができるが、本論では、イギリス・ロマン主義の時代に生まれた「会話詩」という抒情詩のサブジャンルを『序曲』の原型と考え、カラーの抒情詩の理論を応用して、複数形の一人称、二人称が指す範囲を広げて解釈している。
- 12) 粕谷栄一の詩は、ページ数で表示する。
- 13) 粕谷が知っている水仙の咲く場所は、「無数の水仙が、常に咲き乱れる、恐怖のようなところ」であり、暗く寒い「湿原」で、「微風が吹くと、絶叫のような美しさが、一齊に翻える」と描写される (14)。
- 14) 19世紀後半、近代化を急ぐ日本が、ヨーロッパに先駆けて、総合大学の陣容をそろえていった点については、理系では、1886年に、帝国大学が世界で初めて「工学部」を備えたことも忘れてはならない。隠岐さや香は、工学部設立を「理工系教育の歴史においては、革新的」と評している (101)。
- 15) 漱石の作品に関しては、『定本漱石全集』のすでに刊行されている巻については、『定本漱石全集』を用い、刊行されていない巻については、『漱石全集』を用いる。イギリス・ロマン派が漱石に与えた影響については、アルヴィ宮本なほ子「漱石の淡黄の花——「草枕」とイギリス・ロマン主義」を参照。本論は、「漱石の淡黄の花」と一部重なる部分があるが、

そこに書ききれなかった新しい部分を書き加えている。

- 16) 「倫敦消息」(「其二」)でも同様のことを述べている。
- 17) この点については、アルヴィ宮本なほ子「漱石の淡黄の花」を参照。漱石の漢詩における黄色の独特の使い方については、和田を参照。
- 18) 漱石が子規に宛てた長い手紙の内容(1901年4月9日の日記)を、子規がその前文と結びを除いて「倫敦消息」という題名をつけ『ホトトギス』第4巻8号に掲載した。その後、子規は、漱石が子規に宛てた4月20日の手紙の結びを除いたものを「其二」、4月26日の手紙全文を「其三」として『ホトトギス』九号にまとめて掲載した。[人間を去る三舎色]とは「三舎を避く」(春秋左氏伝)という成語から由来するもので、はばかりさけることを意味する。ここでは「人間の色」とはとてもいえない、という含意で使われている。一舎は昔の中国の軍隊の一日の行程(三十里)を指す。三舎は九十里(『定本漱石全集』12: 632-33)。
- 19) “Soseki (London: December 1901)”の初出は TLS 1984年4月6日号。
- 20) 12編の短編連作集『黄金の時刻の滴り』(1993)の最終章。この連作で取り上げられた詩人、作家は、作中に実名は示されていないが、題名に添えられたエピグラフで暗示される。「野分のあと」のエピグラフは、K. Natsumeの「英訳方丈記序文」から取られている(373)。
- 21) ワーズワスの詩作品については、*The Prelude*を除き、ペンギン版を参照する
- 22) ラマザーニは、“a secular Anglo-Persioan American, born to a father of Iranian Muslim Origin and a mother with a Zoroastrian Iranian father and a Protestant English mother”という今までの英文学のポストコロニアル批評の評論家たちよりもさらにイギリスやその植民地、宗教から離れた出自の英文学者である(19)。